

鬱陶しいほど、暑さが肌に纏わりつく夏の空。そこを蝉の声が忙しく飛び交っている。どこまでも広い紺碧が、遠くに見えるギラギラとした街並みまで伸びていて、さらにその向こうには、大きなマシュマロのような入道雲が浮かんでいた。それを大きな青のキャンパスに乗せると、1つのアクセントになっていて、見えて飽きない。雲が少しずつ形を変えていく姿を、ただぼんやりと、仰向けになって眺めていた。欠伸をすると、静かに流れてきた風が、街のどこかの花の香りと、暑さの中に紛れたほんの少しの涼しさと肺が満たされて、何も食べていないのにお腹がいっぱいになる。この香りは……ヤマユリだろうか。この辺りは花屋さんがいくつあったから、そこから飛んできているのかも。

ここには誰もいない。トレセン学園の屋上はいつもそうだ。みんな食堂に行ったり、真面目なやつは勉強したり、コース走ったり、廊下走ったり。アタシはそういうの、パス。アタシは一人で過ごしたい。何かに縛られたくないし、何も考えず、気ままに過ごしたいから、学園の喧騒を避けてここに来る。いつもここで顔を合わせるのは、気ままなウマ娘たちばかりだ。ナリタブライアン、アドマイヤベガ、ミスターシービーさん。時々、顔を合わせては思い思いのことをして、過ごしている。あとは、猫。この学園では、猫が時々現れては、何処かで寝ている。屋上、体育倉庫……。アタシが寝たい場所に猫がいるときは、

そこを譲る。だって、先に見つけたものの勝ちだから。でも、この屋上ならそんな心配はいらない。体育倉庫とか木の上とかは1人分しかないけれど、ここは広い。だから時々、猫と一緒に寝る。この暑さだと、猫も参っちゃうのか、日陰に集まって、ぐでーっと伸びている。アイスが暑さで溶けてしまうように、猫も溶ける。それを真似して、アタシも日陰で横になって伸びた。そしたら案外心地良い。体を動かさないことで、些細なそよ風の涼しさが、体を撫でていく。そうして、アタシは今もこの屋上に来て、猫のように体を伸ばして空を見ていた。近くににいる猫は、黒色に、金色の目が映える子で、ここの常連だ。いつも顔を合わせている。

みんな猫みたいに、もっと気ままに過ごしたらいいのに——なんて思う。争いとか、世間体とか。世の中は疲れる。もちろん、負けたくない時はあるし、アタシだって負けず嫌いだ。けれど、ずっと張り詰めた疲れちゃうから。この間のレースでも、チケットに負けた。みんな、アタシと違ってたくさん食べるし、たくさん走るし……。アタシだってたくさん食べたい。けど、どうしたって入らないんだ。まるで体が猫にでもなったかのようなサイズしか食べられない。そういうえば、ある時、「アタシは猫になりたい」みたいなことをハヤヒデに言ったら怒られた。「タイシン。君には素晴らしい脚があるんだ。走らないのは勿体無い」って、あの特徴的な髪を揺らして、アタシに迫ってきた。思い出すと、ふっ

と笑ってしまう。けれど、ハヤヒデは速い。その強さを思い出して、笑っている自分に嫌気が差して、ため息を付いた。

大きいポケットのような空に、ぼんやりとした考えとか、言葉にできない感情を詰め込んでいく。口に出すほどでもない、でも吐き出さないと重りになる混沌とした気持ちを、シャボン玉のように空へ飛ばすと、ほんの少しだけ気持ちが悪くなる。ふわふわと浮かんでいっては、どこかで弾けて消える。消えると同時に、頭にへばりついた悩みも一緒に弾けて消えた。

そんなことを繰り返して、大方の悩みを取り除くと、少し眠くなってきたのか、欠伸が出た。目を擦ると、タイミングを見計らったかのようにチャイムが鳴った。授業の始まりが近づいている。

行かなきゃ。そう声に出した——つもりだった。

不思議なことに、アタシの声はアタシ自身には届かなかった。普通、自分自身の声は最低でも自分には届くはず。なのにアタシの声はどこにも響かなかった。代わりに聞こえたものがあった。「にゃあ」——そんな可愛らしい、小さな声。それは紛れもなく猫の声だ。さっきまで近くにいた黒猫は、いつの間にかいなくなっていた。音も無く消えて、少々不気味さを覚える。それに、黒猫の鳴き声じゃないとしたら、アタシが聞いた鳴き声は一体どこ

から聞こえたんだろう。近くに、見知らぬ猫がいるかも知れないと思って、あたりを見渡してみる。それでも、誰もいない。ただそこには、夏の熱気が地面を焦がしているだけだ。気の所為か。

そう言ったと思ったら、また「にゃあ」と甘えたような鳴き声がどこから聞こえた。かなり近く感じたけど、誰もいない。どこにいろんだろ、と手を地面について体を起こすけれど、アタシの体を支えているその手は、いつも見慣れている形じゃなかった。

ブラウンのふわふわな毛。何かを掴むのではなく、地面を蹴るために特化した形。恐る恐る手のひらを見ると、6つの柔らかなピンクの点々が配置されていた。少し力を入れると、ふわふわの鞆の中から、何でも切り裂けてしまいそうなほどの鋭い爪がひょっこり出てくる。まさか——そう思いつつ、ブラウンの毛と肉球の持ち主を視線で追いかける。視線はそのまま下へ向かって、アタシの体を写した。

アタシは、猫になっていた。

こんなとき、身近なアイツらだったらどうなるんだろう。チケットなら、泣いちゃう。ハヤヒデなら、きつとなぜこんな事が起きたのか、分析を始めそう。

アタシは……あまり驚かなかった。アタシが不思議なことに遭遇したとき、びっくりしたり、気味悪がるのかな、と思っていた。でも、いざ目の前で、しかも自分が不思議なことを体験したとき、アタシは自然と受け入れていた。当たり前のような気分だった。例えるなら、人間が生まれてから、いつの間にか二足歩行になっていく、それぐらい当たり前の感覚。

アタシは一度、全身を見回してみた。どこまでも指が入っていきそうなお腹。くの字に曲がった後ろ足。山並みの背中。アタシの尻尾は、ウマ娘のときとは違って、白と茶色のシマシマだ。さらさら、というより、ふわふわ。それが、自由気ままに右へ、左へ、ゆらゆらと動いている。それを目線で追いかけていると、思わず飛びかかりそうになってしまう。そのまま自分の猫になった姿を、色々と観察していた。猫は何度も見てきたが、普段とはぜんぜん違う目線で、意外と面白い。

暫くの間、そんなことをしていたけれど、大事なことに気づいた。これは、どうやら元に戻るんだろう。思えば、さつき「みんな猫みたいになって、気ままに過ごしたらいいのに」なんて言ったから、猫になっちゃったのかも。

しばらくウンウンと考えていたが、考えても仕方がないという結論になった。さつきと同じように、空を眺めた。空は相変わらず夏の顔をしてギラギラと、屋上を焼いていた。そ

こに浮かんでいる入道雲がふわふわしていて、美味しそうに見える。ウマ娘だった頃と変わらず、ただ時間が流れていく。大きな欠伸が出た。口に入った空気はやっぱり、アタシがウマ娘だった頃とあまり変わらない味がした。

案外、猫も悪くないかも。そう思った。今、どれだけ元に戻ることを考えても、わからないんだ。それなら、猫を楽しんだほうがいいんじゃないかな。心の何処かでそう思い始めていた。

そうだ、せっかく猫になったんだし、あちこちを歩いてみようかな。突然、そんなことを思った。なんの脈絡のない思いつきだったけど、猫はそういうものだ。急に甘えてきたかと思えば、急に飽きてどこかへ行く。唐突な考えは、猫の本能なのかもしれない。

仰向けで空を見ていた姿勢を、ゴロンと転がって、伏せの状態にする。猫の体は液体、とはよく言うけれど、実際動かしてみても、何となく分かる。アタシの体が俊敏に変えられるのがよく分かる。伏せの状態からいつものように立とうとする。けれど、バランスを崩して転がってしまった。考えてみれば、それもそのはずだ。今のアタシの体は猫。猫は二足歩行じゃないから。それならと、気を取り直して4つの足で立ってみる。これが案外、違和感無く姿勢を保てた。むしろ、この姿勢が自然であるように感じた。いや、猫からすれば当たり前前の姿勢なんだけれど。

さて、外に出なければ。幸いにも、屋上の扉は開きっぱなしだった。ウマ娘の時とは比べ物にならないほど巨大に見える出入り口を通る。そのまま階段を一步一步降りていく。これがなかなか難しい。やはり、階段は二足歩行用に作られたのだと、よくわかる。階段を降りると、廊下に出る。いつもとは違う目線で新鮮だ。いつも何気なく通っている道だけど、今日は何から何まで景色が違う。それに、後者は不気味なほどに誰もいなかった。さっきまでの喧騒が嘘のようだ。いつもウマ娘で溢れかえっている場所が、誰もいないのは、アタシに不安を覚えさせた。

何気なくフラフラと歩いていると、ひんやりとした風が顔を撫でた。いや、正確には猫髭を撫でた。風の流れを手取るように読むことができる。猫の特技のひとつなんだろうけど、これが面白いほどによく分かる。風の強さ、流れ、温度……。ウマ娘のときとは違った風に感じた。目に見えるわけじゃないけれど、過敏なほどに感じ取れた。猫になったアタシの本能は、風の源流へ進み出す。

風を探して、アタシは階段を降りた。一步ずつ、一步ずつ、慎重に。でも、時折ジャンプして二段飛ばししてみる。ウマ娘の時だったら誰かに怒られそうなことも、猫の姿ならやり放題だ。そうやって夢中になっていると、一番下、つまり、学園の出入り口まで来た。外の暑さと、室内のクーラーの涼しさが幾重にも重なり合って、アタシの猫髭をくすぐる。

とても心地が良い温度で、さっきまで寝ていたのに、また眠たくなってくる。というより、猫としての本能は寝たいらしく、アタシの意識とは関係なく、アタシは横になっていた。地面の冷たさを感じつつ、アタシは、猫がいつも寝ているのは、こういうことなのかもしれない……と1人納得した。

しばらく、その場でゴロゴロしていると、近くに誰かが立っていることに気づいた。こちらからは太陽の影で顔が見えない。けれど、着ている服や頭から生えたウマ耳を見ると、ウマ娘であることが分かる。そいつが、アタシの猫の体を優しく撫でた。かなりくすぐったい。けれど、だんだんと手から、夏の暑さとは違う優しさの温もりを感じて、なんだか心地いい。猫は心地良いと、喉がゴロゴロと鳴る。例に漏れず、アタシもゴロゴロとなつてしまった。なんだか恥ずかしいけれど、気持ちよさには勝てない。アタシは嫌がることなく、身を委ねていた。

「よしよし、いい子いい子」

そいつはアタシを甘やかすように声をかけた。

顔が太陽の影で見えないけれど、なんだか聞いたことのある声だ。けれど、やっぱり気持ちよさには勝てなくて、アタシは喉を鳴らしてだらだらする。

「かわいいなあ」

わしゃわしゃ、と撫でる力がどんどん強くなっていく。少し嫌になってきた。猫の不満が溜まると、イカ耳になると言うが、今のアタシはなっているのだろうか。とりあえず嫌だと言うことを知らせるために鳴いてみる。

にゃおーん。

一瞬時が止まる。撫でる手が止まっている。案外迫力ある鳴き声が出来たんじゃなからうか。自分の声を聞いてて、自分でもよく出来たと思った。

「かわいい！ 甘えてるのー！」

……撫でる力が下がることはなく、むしろどんどん強くなっていく。だんだんとムカついてきた。不満が溜まっていくのが自分でもわかる。牙を向いて噛みついてやりたい。そこまで思ったとき、アタシの猫の部分は、爪を出した手を相手に向けて、パンチしていた。やべ。と思ったけれど、そのパンチは相手に当たること無く、制服の胸のリボンに引っかかった。すると、ポロツとリボンが取れた。リボンは首にかけて留め具で留めるタイプなんだけど、多分留め具が弱っていたのか、簡単に取れてしまった。

落ちた瞬間、アタシとそいつの間には一瞬時が止まったように、動きがなくなった。何が起こったのかわからなかったから。でも、そいつがリボンを取る前に、アタシはそれに飛びかかっていた。なぜそうしたのかはわからない。アタシの中の猫がそうしたのかもし

れない。とにかく、そのリボンを咥えると、アタシは脇目も振らず走り出した。

「あー……ッッッ！」

後ろから叫び声が聞こえるが、どんどん遠ざかっていく。ちょっと罪悪感があったが、猫としては、してやったりの気分だった。もちろん、あとで返そうと思う。けれど、アタシの中の猫はスカッとしたと同時に、ワクワクしていた。新しいおもちゃをゲットしたというか、獲物を捕らえたような。猫がいたずら好きなもの、こういうのが理由なのかもしれない。自分自身で理解するとは。

とにかく走り出した。二本足で走ったときと同じ感じで走れる。これがまたすごい楽しい。走るリズムがウマ娘の時と違って、タタタタタタン——と胸に響いてくるリズムが、経験したことないのに、何故だか懐かしさを感じる。叫び声が泣き声に変わってから、聞こえなくなっていた。

久しぶりに、走るのが楽しいと思えたからだろうか、しばらくあちこちを走り回っていた。気づくと、さつきとは全く違う場所、いつの間にか校舎の反対側の方に来ていた。

さつきまで走り回ったからか、急激に眠気が来た。どこか眠れる場所はないか、とあちこちを見渡してみた。ベンチ、草むら……とまで見たとき、アタシの体は勝手に動き出していた。向かった先は木。アタシの体は、ぶるるっと震えて、鋭い、鎌のような爪を生やし

た。それから、後ろ脚に特大の力を込めると、ぴょん、と幹にしがみつく。樹皮に食い込む爪は丈夫で、アタシの軽い体を難なく支える。猫が木を登ることは知っていたけど、どうして登るのかは知らなかった。もしかしたら、獲物を捉えたときに登るのかもしれない。アタシの獲った獲物はリボンだけど。そうこうしているうちに、いつの間にか幹の頂上、木の上まで登り切っていた。なんだかんだ、木の上は心地良い。何回か、ウマ娘のときにも寝ていたけれど、猫になってからより心地良い。暑さは木陰に遮られて涼しいし、うとうとしちゃいそう。木の幹の上で、リボンを横に置いて、体をぐーっと伸ばす。一頻り伸び切ると、猫のように丸くなってみる。まあ、今は猫なんだけれど。

木の上に登った猫は、降りられないということを思い出した。いざ試してみようと、目線を下に向ける。めちゃくちゃ高い。一体どうやってこんな高さを登って来れるんだ、と思えるほどの高さだ。思わず、後ろ脚がすくむ。ただまあ、どうにかなるかな、とも思っていた。それほどにここは心地いいし、今はなんだか眠たい。夜更かしした時のあくびがめちゃくちゃ出てくるような、そんな眠たさだ。

そうしてゴロゴロしていたら、いつの間にか寝ていたらしい。近くに聞こえてくる声で目を覚ました。ただ、そんなに寝ていないからか、アタシはかなり不機嫌だ。ムカムカする。時々、寝起きにすごいムスツとした猫がいたが、こんな気持ちなのかもしれない。近く

で聞こえる話し声は、どうやらさつき、アタシを撫でていたやつらしい。声がおんなじだ。多分だけど、リボンを取り返しに来たのだろう。それぐらいは予想できた。けれど、さつきと違うのは、そこに新しい2つの声が聞こえてきたことだった。一人は、低く張り切った声。もう一人は、めんどくさそうでテンション低めの声。どっちも、どこかで聞き覚えがあるんだけれど、なんだか思い出せない。どうやら猫になつてから、記憶力があまりないらしい。たしかに、3日すると飼い主の顔を忘れる子もいる、とは聞いたけど、こんな感覚なのだろう。

さつきまで聞こえてきた話し声は、いつの間にか小さくなっていた。聞こえはするけど、明らかにさつきよりボリュウムが下がった。面倒くさいけど、声のする方へ視線を向けてみる。けれど、その先は木の葉で見えない。いちいち動くのも面倒なので、アタシはまた寝ることにした。二度寝は気持ちいい、とは言うけれど、猫になつても気持ちいいのは変わらない。猫とウマ娘で感覚が変わらないのは面白いな。少しだけ起こした体を再度寝かせて、もう一度眠る。

「おおおおおおおーーーーーいいいいいいつつつつつつつ！……！……！」

突如、爆音、轟音、大音響が耳を刺激した。耳鳴りが起きる前に、アタシの体は俊足で駆け出す。それが木を飛び降りていることにも気づかず、アタシは地面に着地した。さっきまであんなに恐怖だった高さの木から降りられたことを驚く暇もなく、アタシは轟音から逃げ出した。もちろん、口にはリボンを掴みながら。とにかく、あの音から逃れるまで、かなり走った。猫は、ウマ娘とは違って瞬発力に強いんだな、と走りながら感心していた。もちろん瞬発力に優れているウマ娘もいるだろうけれど、アタシはどっちかって言うところスティーヤーなので、経験したことない。周りの景色が高速で流れていく。まるで電車の中の景色のようだ。

さっきの轟音は何だったんだろうか。怪獣の鳴き声かと聞き間違うほどの迫力だった。猫はびっくりすると、とんでもない速さで逃げていくが、今の自分がそうなのか、としみじみ感じた。

どこまで走ったのだろうか。とりあえず、まだ学園の中だ。もうどこににいるかわからないが、校舎は見える。向きのに、入口から左側。さっきの場所から少し離れた林の中に来た。さっきの木の上は心地よかったが、ここはまた違う気持ちよさがある。風自体に涼しさ、というか、この場所自体が冷蔵庫のような、全体に涼しさを持っている。

アタシの口にはまだリボンがいた。さっきは眠たくて遊べなかったから、持ってきた。暫

くの間は、持ち主に返さないだろう。もうしばらく痛い目にあってもらわなくては。猫の恨みは深いのだ。それに、なんだか懐かしい匂いがして、これまた心地良い。

それでしばらく遊んでいた。掴んで、蹴ったり。噛んで振り回したり。寝床にしたり。気ままに遊んでいながら、巨大な林の中を進んでいた。高々と聳え立つ木を背にしながら、ゴロゴロとしていると、アタシの猫の本能は、何かを見つけたようだった。鼻をひくひくさせて、アタシはその気配のする方へ向かった。

輪。輪っかだ。紐で作られた輪っかが、ポツンと置かれていた。ただ本当にそれだけだ。食べ物置いてあるとか、気持ちよさそうな寝床が置いてあるとか、そう言うわけではなく、ただ本当に輪っかがそこに放置されていた。しかし、アタシは何故だか、その円の中心に座りたくなっていた。誰がどう見たって罠だ。もはや隠されていない。何かをしようとする魂胆が見え見えだ。大方、さっきの大声出したアイツが、アタシを捕えようと一計を案じたのだろう。しかし、アタシはそれに逆らえない。さっきから、アタシの理性と猫の本能がせめぎ合う時、猫の本能が勝ってしまう。それほどまでに、猫としての意識が強くなってきたいるみたいだ。

円の中心にゆっくりと腰掛ける。なぜか、ものすごく落ち着く。なんだかあるべき場所に落ち着いたような感覚だ。まるで、服の前後を逆に着ていて、もとに戻したときのように

な、しつくり来る感じ。あれに似ている。猫というのは、不思議な習性は何個もあって、そこが可愛いというか愛おしいのだけど。そういえば、こんな習性もあつたなあ。

リボンを口に咥えたまま、じつと上を見ていた。葉の隙間から漏れる光はシャワーのよう。アタシは目を細めて、じつと空を見ていた。林の中を駆け巡る風が時々さつと体をくすぐつてきて、それがより一層アタシの眠気を呼び出す。大きなあくびが出る。ふわあ、と声を出してみると、やっぱり猫の鳴き声になって、自分が猫なんだと改めて自覚する。よく猫はあちらこちらで寝ている姿を見かけるが、それはきつと、眠たいからじゃなくて、心地良いから寝ているんだと思う。今のアタシみたいに。

ふと、木々のざわめきが止まった。林の中の風が止んでいることに気づいた。蝉の声すら止まって、あたりは静かだ。それなのに、時折、風の流れる音が聞こえてくる。しかも、それは自然な風の流れとは違って、風が行ったり来たりする音だ。音のする方向へ、耳が向く。どうやらあっちの草むらの影に、誰かがいるようだ。3人。どうせさっきの3人組だろう。

風の流れが更に急激に変わった。いや、普段、ウマ娘のときに感じるような、急激な流れじゃない。本当に、ほんの少しの変化。それが意味するところは、アタシの猫髭によれ

ば、何かが急に迫ってきている、ということだ。それを理解する前に、本能はアタシの足に力をためて、思いつきりジャンプした。さっきの木の上に登るときのように。ただその時と違うのは、爪を出していないことと、真上に飛んだこと。

瞬間、誰かがさっきまでアタシのいたところに突っ込んできた。そいつの顔は地面を向いていて見えなかったが、尻尾が生えているから、ウマ娘だろう。そいつは空を掴むと、そのまま顔から地面にダイブした。当然、ジャンプしたアタシは着地をしなければいけない。真上に飛んだので、真下に着地する。つまり、突っ込んできたウマ娘の後頭部へ、アタシは着地した。

「ぐえっ」

カエルのような、情けない声が下から聞こえた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおっつつつ！！！！」

今度は爆音を鳴らしながら突っ込んでくる影が現れた。しかし、アタシは今、猫である。つまり、さっきと同じように風の流れを感じ取っていた。猫の本能は、再度ジャンプした。もちろん、下にいるウマ娘を足蹴にして。カエルが再度鳴いた気がした。爆音は、もちろ

んアタシを捕まえられなくて、アタシが元いた場所。つまり、最初に突っ込んできたウマ娘の背中へダイブした。

「ぐえええええつつつ……！！！！！！」

……カエルが潰されているような鳴き声でした。そして、ジャンプしたアタシは再度着地する。もちろん、下にウマ娘2人を土台にして。

「ぐえええええええつつつ……！！！！！！」

今度はカエルが2匹になったようだ。

ふう、と一呼吸置く。ウマ娘の寝ているところを邪魔しようとは、どういう見だ。……あ、いまは猫か。

この状況、傍から見たらどう思われるだろうか。もし、誰かが。地面に置かれた円の上に、ウマ娘が2人、縦に重なっていて、その上に猫が鎮座している――。まるでなにかの儀式みたいだ。

飽きたアタシは、そいつら2人を放っておいて、また別の場所へ歩き出すことにした。

結局、ここが一番。

アタシは校舎に戻ると、階段を登って屋上に来ていた。夏の日差しは相変わらず、コン

クリートの床を照らしていた。地面から熱が揺らいでいる。

アタシは横になって、口に咥えていたリボンを離した。体の側面から熱をたつぷり染み込ませる。反対の側面には、涼しい風が靡いていく。ふわあ、と大きなあくびをした。睡眠を邪魔されたからか、眠気はマックスに近くなっていた。

ふと、アタシの近くに誰かいることに気づいた。いつからいたんだろう。撫でられている。でもそれは、最初に撫でられた時とは違って、すごく優しい。猫のことをよく理解しているのか、はたまたアタシのことをよく理解しているのか、心地いい部分をピンポイントで撫でてくる。その人はアタシの顎を優しく撫でた。ゴロゴロ、と自分の喉から無意識に音が鳴っている。その人の大きさにとても安心する。

「……………」

その人が何かを言ったけど、アタシにはわからない。人の言葉が理解できない、ということではない。眠気に抗えず、意識が遠のいているからだ。体がふわふわと浮くような感覚。水の中に入っているような。それに意識を委ねると、ふわりと浮いた体がより軽くなっていく。

温もりが全身に回って、アタシは目を閉じた。